

# U・A・モシコフ 『全面的農業集団化期の穀物問題』 (1929年-1932年)

誌名	農業綜合研究
ISSN	03873242
著者名	丸毛,忍
発行元	農林省農業綜合研究所
巻/号	23巻2号
掲載ページ	p. 223-224
発行年月	1969年4月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



U・A・モシコフ

『全面的農業集団化期の穀物

問題』(一九二九—一九三二年)

一九六六年モスクワ刊、二二〇頁

Ю. А. Мошкoв, *Сеpуосая пpоблема в 20-й сpавоуной коллeктивизацую сельского хозяйства СССР (1929—1932гг.)*, 230 сp. 1966г., Москва.

丸毛 忍

本書は後進国が急速な工業化を実施する場合に起こる穀物問題、食糧問題についての一つの実証的な研究である。もちろん、ソ連の場合は労農同盟を基盤とするプロレタリア国家権力が農業の集団化をつうじてこの問題の解決を計った点に大きな特徴がある。だから、本書の研究は、食糧問題解決の社会主義的なモデルの一つを提供するものともいえよう。

著者のU・A・モシコフはモスクワ大学関係者らしいが、経歴や他の業績については全くわからない。かれには後進国工業化の際の食糧問題についての理論や政策を研究するといった問

題意識はほとんどみられず、本書も二〇年代の終りに穀物問題の起こった社会経済的原因を追求し、集団化へのその影響を明らかにする」のが執筆の目的だという。著者の関心はあくまでソ連の農業政策、共産党の政策の歴史的研究にあるようであり、最近、ソ連の歴史家の間で農業集団化のみ方が一つの論争点となっている事情とも通ずるところがある。

著者は序章でソ連の食糧問題について次のようにのべている。「穀物問題とはソ連の穀物生産と急速に増加するその需要との間の歴史的に形成された不一致であり、この問題の解決は、絶えず増大する穀物需要を充足することを意味する」、「穀物問題は二重の意味をもつ。その一つは必要な国家穀物ファンドの動員であり、……その二つは国民経済のあらゆる必要を完全に充足するまで国内の穀物生産を増大することである」と。

ところが、スターリンは一九三四年穀物問題は「成功裡に」解決されたと演説し、穀物問題を第一の問題のみに限定し、第二の問題を黙殺してしまったという。第一の問題とは、具体的には都市住民への供給と外国機械輸入の見返りにする穀物供出量を確保することを意味する。その後、ソ連では穀物問題は農業集団化時代に解決すみとの見解が、ずっと支配的であった。

「目測による取量」あるいはロスを全く認めない「生物学的取量」の採用によるソ連統計の水増しは、穀物問題についてのこ

のスターリンの思考と無関係ではない。また著者は以上のような見地から過去の文献の批判をも行なっている。

穀物問題について過去の政策や理論のこのような批判の上にたつソ連学者の著書は、書評者の知る範囲では最初のものである。著者が本書で取り扱っているのは集團化期であり、当然、第一の問題が中心となるせいもあるが、穀物問題が市場をつうじて直接価格問題として現われてこない国であるため、著者のみ方はすぐれて物量的なのを免れない。

## 二

モシコフは上記のようなソ連の穀物問題についての基本認識にもとづき、序章をのぞく三つの章で、全面的集團化期（一九二九—一九三二年）の穀物問題を当時のかなり制限された資料を丹念に整理して、実証的に説明しようとする。

著者は穀物問題の発生については、農地改革によって農家数が二千万戸から二千五百万戸にふえ、経営が細分化し、穀物の商品化率が半減したのにたいし、工業化にともなう都市人口の増加と外国機械輸入の見返りのための穀物需要が急増した事情に求め、一九二八年には穀物商品化量の三分の一を富農に握られ、都市の穀物ストックは枯渇し、輸出はほとんどストップするほどの政治的危機をまねいたことを明らかにし、二八年から

穀物調達に強い行政的措置がとられ、二九年から三〇年にかけては階級としての富農の一掃、農業の全面的な集團化が強行され、三〇年からは都市に食糧切符制が施かれていく過程を克明に描写し、最後に、集團化は穀物の商品化率を倍増し、国民経済に必要な穀物を供給することができたとの結論に達する。

これは今日では少しも奇警な説ではないが、著者は充分な実証をつうじて自説を展開していく。特に地域的なデータとその分析には、従来の研究にくらべて新しい点がみられる。例えば、穀物の主産地で、集團化がもっとも早く進み、消費地がもっとも遅れたことの例証などは面白い。だが、著者の実証的努力は通説をつき抜けるような方向には進まない。また、全面的集團化に反対したというプハーリン派の説をも取り上げているが、旧来の批判の枠を一步も出していない感じがする。

本書はスターリン批判が定着した時点で、ある程度自由な集團化期の穀物問題を論じており、かつ、かなり高度の実証性をもつ研究として充分評価してよいものである。ソ連の穀物問題を研究するものは逸してはなるまい。だが、著者もいうとおり、ソ連の穀物問題は生産力の未展開という点では、むしろ集團化以後に問題があり、一九六三年以後の兎作、外国小麦の大量輸入は、ソ連では第二の、いわば本来の意味での穀物問題はなお未解決であることをたまたま露呈したものとみられる。